

# コウノトリ育む農法の良食味栽培指針の作成

## 【背景・目的・成果】

環境創造型農業であるコウノトリ育む農法(無農薬タイプ)では、収量が少なく、玄米タンパク質含有率が良食味の指標である6.5%(水分14.5%)を超えるほ場がみられます。

このため食味への影響が指摘されており、収量および食味を安定させる栽培技術の改善が望まれています。

そこで、コウノトリ育む農法は、従来のコシヒカリ良食味栽培指針と生育の様相が異なるため、コウノトリ育む農法に適合する新たな良食味栽培指針を作成しました。

## 1 食味の実態

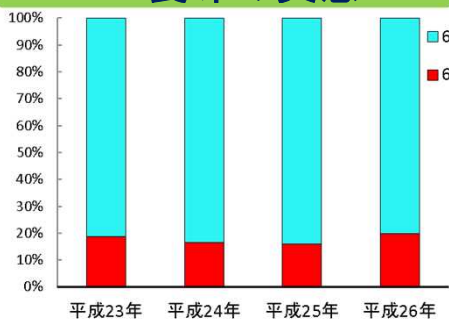


図1 コウノトリ育む農法栽培ほにおけるタンパク質含有率の実態

## 2 生育と食味・収量の関係

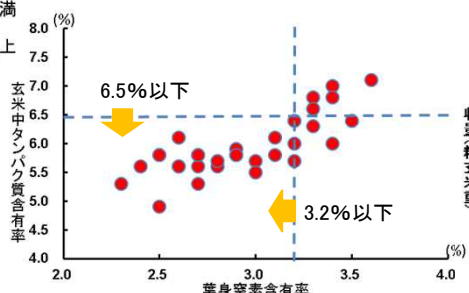


図2 穂揃期における葉身窒素含有率と玄米タンパク質含有率の関係

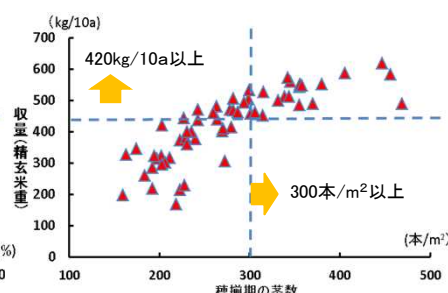


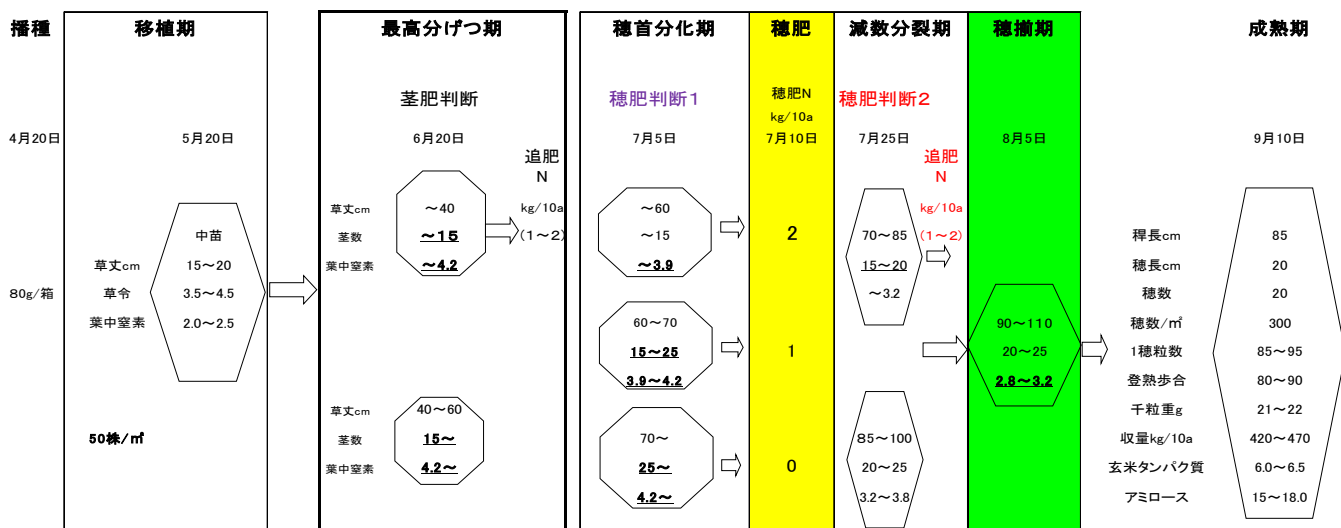
図3 穂揃期における茎数と収量の関係

コウノトリ育む農法(無農薬タイプ)における食味関連成分を調査したところ、20%程度の圃場で良食味の目安であるタンパク質含有率6.5%を上回りました。

穂揃期における葉身窒素含有率が3.2以下であれば収穫した玄米のタンパク質含有率が6.5%以下になります。

穂揃期における茎数が300本以上あれば収量(精玄米重)は420kg/10a以上になります。

## 3 コウノトリ育む農法良食味化生育指標



最高分けつ期、穂首分化期および減数分裂期に生育診断を行って、指標に示されている基準に従い、適切に肥培管理をすることで、収量420kg/10aでタンパク質含有率6.5%の良食味米を収穫することができます。

## 【技術の活用】

コウノトリ育む農法生育指標に基づき管理することで、良食味化と収量性を両立することができます。コウノトリ育む農法アドバイザー研修会等で活用し、農法の現地実証ほどの肥培管理に活用されています。